

鴻 koh

月刊俳句誌

令和3年7月1日発行
(毎月1日発行)
第16巻第7号 通巻181号

7 月号

2021

創刊15周年記念号



野へ出でよ夏百日の始まりぬ

小げら赤げら林中の黙深めけり

緑陰に石棺二つ鶉の声

斑猫の失せたるあとの淋しさよ

来歴の川を眼下に草矢打つ

紫烟草舎へ来よ四十雀鳴きに来よ

夏来るか

主宰作品

増成栗人

ぼうたんの風を入れたる奥座敷

夏来るか樹の幹に触れ瘤に触れ

日雀山雀僧に円座を勧めらる

写経して畳一枚分の夏

山里の寺で始まるお風入

草蔭にまだあたらしき蛇の衣

日も風も雨も明るき麦の秋

詩 作品抄

職員室の机の布陣四月来る

神野未友紀

雲雀野は詩口遊ぶによきところ

待場陶火

花こぶし夜はまほろしの蝶となる

山内宏子

夜桜のうしろの闇の息遣ひ

吉清和代

蘆の角沼が暮色に染まるとき

相川 健

春霞三十二階の庁舎カフェ

原 光生

木の芽草の芽どの切株に座らうか

横山光榮

バードウィーク暮らしに隙間殖えてくる

倉林はるこ

言の葉を紡ぐごとしよ滝桜

鈴木隆一郎

安騎生忌の庵に残る蝮酒

松田那羅生

スカートのパステルカラー水温む

綾戸五十枝

春驟雨慣れた手つきの裾捌き

山田ゆきこ

ゆうらりと刻の流るる蝶の昼

田 邑利宏

春深し間歇泉の湯気の中

鈴木 崇

春セーター歩幅大きくなりにつけり

北原沙織

もう陣を組むこともなき春の鴨

山崎正子

パンジーやイサムノグチの滑り台

北城美佐

木五倍子咲く道遠回りにはよき小道

小林和子

アラーム音届かぬ春の夢の中

中川幸恵

落椿お伽の舟となる水面

山口優子

増成栗人 選

第十五回「鴻」賞 受賞作品

「鴻」賞を受賞して

林 未生

この度は身に余る賞を頂きまして誠に有難うございました。

これも主宰はじめ諸先輩方、並びに「夕陽ヶ丘句会」の皆様のおかげと心より感謝しております。

七十歳で始めた俳句もすでに十二年目となり、受賞という喜びとは裏腹に、年齢的な不安も感じつつあります。が、ある本に「俳句はまさに老境を支える文学だ。パールの高さは無限である」というくだりを読んで、こんな私でもあと少し頑張ってみようと思っております。

主宰を始め、ご推挙いただきました皆様、誠に厚く御礼を申し上げます。



略歴

昭和十四年 和歌山県生まれ

平成二十二年 「鴻」入会

平成二十四年 第六回「鴻」新人賞

俳人協会会員

古都に雨

林 未生

うたかたの夢かふはりと春の雪
こんもりと塚あり花の散るところ
ゆりかもめ春の夕焼の海へ向く
日ごと来てはや葉桜となる水辺
家籠りの日なりカンナのまくれなる
額紫陽花は星くづのファンタジー

花アカシア物思ふときふと戻る
芋殻焚き夫に告げたきこと多し
空真青なり秋茄子の漬かり頃
鹿が寄る大きな木陰古都に雨
大和まほろばつんつんと葱畑
穏やかな日をつはぶきの花づたひ
蔵壁のカフェのほとりの冬至梅
凍蝶の夢の褥となる一葉
ふくろふの鳴くころ背戸の灯るころ
老僧のこゑびんびんと雪が舞ふ

第十五回「鴻」新人賞 受賞作品

「鴻」新人賞を受賞して

藤原明美

句会に参加してまだ日も浅い私に、「鴻」新人賞を頂き、驚きと同時に「頑張れ」のエールを頂いたと身が引き締まる思いです。ご推薦頂いた皆様にご心からの御礼を申し上げます。

主宰、摩耶編集長、世都先生はじめ先輩方の句を家に持ち帰り、読み返す時間がただ楽しく言葉の世界に没頭出来る時間となりました。

今、私は無限に広がる俳句の世界の入口にいます。この先も素直に心に感じた事を詠めるように進んで参りたいと思います。



略歴

昭和二十六年 茨城県生まれ

平成三十年

谷津俳句会参加

大久保俳句会参加

「鴻」入会

「下総句会」参加

夢一つ

藤原明美

きはやかな色はなけれど粥柱
黄水仙気づかぬほどの風の来る
すみれすみれ聞くとはなしの風の声
飛花落花して里山に昼がくる
潮騒を聞く麦秋の丘に来て
蝸牛角と言へどもやはらかき
水切りの子にたうたうと雲の峰
葭雀日暮はものを見たくなる
齒切れよき言の葉一つ秋の水
穴まどひ野辺に夕べの来つつあり
稲架襖調べのやうな風が来る
秋桜みどり児に齒の生まれけり
夢一つありあかあかと烏瓜
ばつたんこ水の重さの音となる
大花野呟くやうに風の立つ
にほどりのよき隔たりに潜きけり

羽音集

増成栗人 選



暮遅し散步済ませし老人に 松戸 吉清和代
 つちふるや新聞の死は既ぐ忘れ
 遠きほど残る記憶や蓬餅
 夜桜のうしろの闇の息遣ひ
 桜散る散り敷く雨のグラウンド
 春霞三十二階の庁舎カフェ 伊勢崎 原 光生
 上州の山河は碧し鳥雲に
 流されてまた引き返す春の鴨
 門扉越え木香薔薇の溢れけり
 アルバムの残る生家よ日雀鳴く
 開きたる句帳ももいろ春の風 土浦 小林和子
 つくしつくし二年続きの捨て畑
 飛花落花浴びて夫訪ふ日なりけり
 木五倍子咲く道遠回りにはよき小道
 弥生三月下駄箱にある赤い靴
 下萌の庭へ出したる三輪車 札幌 北城美佐
 桜さくら北国の空透明に
 パンジーやイサムノグチの滑り台
 焼き立てのパンの香りと春の雨
 揚雲雀市電の走る城下町

ちよつとそこまで

第26回

「六本木・坂の上の未来都市」 鈴木 崇

赤坂方面から六本木に向かう。赤坂サカス、TBSを尻目に赤坂通りを歩いていく。「溜池山王」の地名からも分かるように、この辺りは窪地である。谷間と台地が入り組んでいて、坂道が多い。凸凹の地形が町歩きには楽しい。

赤坂通りをまっすぐ行くと乃木坂に出る。

乃木坂は港区赤坂八丁目と九丁目の境、乃木坂神社前を西に外苑東通りへと上がる坂である。江戸時代には「幽霊坂」と呼ばれていた。乃木坂の名は、ご存じの通り、乃木希典大将の殉死を悼んだことに由来する。

乃木坂手前で左折し、檜坂に出ると檜町公園の入り口、園内を抜けて台地上がれば東京ミッドタウンである。園内の豊かな緑と最先端の商業施設が隣り合う。周辺には大使館も多いので、外国人の子供連れも目立つ。

園内の21.21 design sight は安藤忠雄、ミッドタウン内のサントリー美術館は隈研

吾、乃木坂駅直結の国立美術館は黒川紀章による設計であり、先鋭的な建築群に囲まれ、未来都市に迷い込んだ気分になる。

六本木ヒルズは丘と谷を一括して再開発したエリアである。華やかで祝祭的な雰囲気ながらも落ち着かず、アウェー感を感じてしまう。

テレビ朝日へと下りていく六本木けやき坂通りは、二〇〇三年再開発によりできた坂道。約四〇〇メートルのけやき並木が続くヒルズのメインストリートである。

けやき坂通りに面するテレビ朝日の壁面には、現代美術家・宮島達男のパブリックアート「Counter Void」があった。「あった」と過去形なのは、ガラススクリーンに巨大なデジタル数字が浮かび上がり規則的にカウントされるこの作品、東日本震災後から明りを消しているのだ。時折イベントで再点灯される機会もあるのだが、デジタル数字の明滅と街行く人々のシルエットの交差が美しかっただけに、ヒルズの日常的な光景がいつの日か戻ることを願っている。

麻布十番まで歩いてくると、少しほっとする。かつて同僚とよくこの辺りで飲み食いしていた。隠れ家的なお店も教えてもらったが、道順を覚えていない。屋台や店頭販売でこた返していた十番祭りはいっつ再開できるのか。

港区三田一丁目と二丁目の境、二の橋から三田通りに抜けていく坂が日向坂である。読み方は「ひゅうがざか」であり「ひなたざか」ではない。

なんだか坂道シリーズの聖地巡礼のような散歩コースになってしまった。



六本木・「Counter Void」宮島達男

栗庵閑話

虫丸



句会で先生に添削を受けた句を自分の句としてもかまいませんか

それはかまわないが たんに句のかたちが整って良かったので終っては欲しくない



添削は選者からの正解例の一つで添削された句の姿から選者がなぜその形に変えたのかをよく考えて欲しい

添削は間違いないの手堅い回答を示すほかないが作者ならいくらでも冒険ができる



できれば その理由を理解して もう一度 その句に チャレンジ してくれたらうれしいな

選者が変えた理由を考えるのですね

なるほどー



試合前は 特盛ラーメンじゃなく 大盛うどんにすればよかったんだー

<http://www.haisi.com/koh/index.htm>